宗教社会学論選　　マックス・ヴェーバー著

　　　　　大塚久雄・生松敬三訳　　　　　みすず書房　1972年

　　　　　　　　　　　2014/12/15 報告　松本倫明

著者紹介

~一　序言~

西洋における合理性

|  |
| --- |
| いったい、どのような諸事情の連鎖が存在したために、他ならぬ西洋という地盤において、またそこにおいてのみ、普遍的な意義と妥当性をもつような発展傾向をとる文化的諸現象が姿を現すことになったのか(P5) |

今日、「普遍妥当的」或は「合理的」と認められる程、発展したものはどの分野においても西洋だけにしか見られない。科学、法学、芸術といった諸分野において、合理性の萌芽は各地域でも見られた。しかしどの地域も西洋における発展段階には達していない。

これは経済にも当てはまる。ヴェーバーは資本主義を「交換の可能性を利用し尽くすことによって利潤の獲得を期待する(P11)」ことにもとづく経済行為とする。

近代西洋において、他の地域では見られなかったような資本主義が生まれた原因は以下の通り。

|  |
| --- |
| 形式的に自由な労働を合理的に管理したこと |
| 住居と経営の場を分けたこと(個人財産と経営財産を法的に分離) |
| 合理的な薄記 |

近代西洋以外の場では、経営は横行や領主による「大規模家政」であった。自由な労働を合理的に組織した経営によって、資本主義が発展した。

著者の目的

資本主義、法、科学。これら西洋の諸文化を合理的にせしめたものは何か。問題となるのは、西洋文化独特の「合理主義」である。この合理主義の成立を解明するには、経済的条件を考慮しなければならない。然し、経済的合理主義もまた、その成立において、合理的な「生活態度」に依存しているのである。

ヴェーバーは本書執筆以前に「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」において、禁欲的プロテスタンティズムの合理的倫理が西洋人の心的態度を条件付けた、と記した。本書では、世界宗教の経済倫理を扱い、宗教と経済、社会との関係を分析し、西洋との比較のための問題点を発見することを目的とする。

~二　世界宗教の経済倫理　序論~

世界宗教

儒教、ヒンドゥー教、仏教、キリスト教、イスラム教、ユダヤ教

宗教的経済倫理

この語が問題とするのは、人々に、宗教に基づいて行為を行なわせる機動力である。宗教は人々の生活様式を規定するものの一つである。そして、個々の宗教において、ある社会層の生活様式が、経済倫理を形成するにあたって主な役割を負った。その社会層は以下の通り。

* 儒教においては、文書的教養を具えた、宦官であった。
* 古代ヒンドゥー教においては、聖典に関する教養を具えた人による、世襲的カースト。
* 仏教においては、現世を棄て、瞑想をこととする托鉢僧
* イスラム教は、初期においては信仰の戦士の宗教であった。後に、下層民を指導者とするスーフィー派が出現する。
* ユダヤ教においては、賤民、及び小市民的知識人
* キリスト教においては、西洋にのみ生まれた市民階級

宗教倫理——苦難の評価

(a)苦難=罪

苦難に対する原生的態度は、不幸な人の扱い方に現れていた。苦難は神に憎まれていることの徴であり、彼らを宗教的な儀礼に参加させることは神の怒りを招くこととされた。軈て幸福な人間は、自分の幸福に正当性を求めようとする。幸福が富や名誉を表すならば、これを正当化することは、支配者や有力者の利害関心を宗教が正当化することにも繋がる。

(b)苦難=聖

苦難という非日常的な状態は「聖なるもの」と評価される。そのような状態は苦行によって目覚める。

(c)個人の苦難の除去

元来、儀礼は個人の利害を超えたものであった。しかし、個々人の苦難を取り除く「霊的司牧車」が現れる。それは条件次第で「教団」をも形成した。後に個人的な苦難からの救いが、宗教的協同態の制度化を招く。この制度化によって市民に序言や告知が与えられ、彼らの利害関心は平民に寄っていく。